

最優秀賞

いのちをいただく

福岡県 北九州市立中井小学校五年 宮下 響

ぼくは、野菜が苦手な時々残してしまうことがあります。そんな時お父さんが、『いのちをいただく』という本を紹介してくれました。

この本は、とある食肉センターの物語です。食肉センターで働いている坂本さんは、この仕事がつっといやでした。なぜなら、生きている牛を殺さなければならぬからです。

心の優しい坂本さんは、いつかこの仕事をやめようと思っていました。

けれどもそんなある日、一匹の牛との出会いが坂本さんの仕事に対する気持ちを変えていきます。この牛は農家の家族が大切に育ててきた牛でしたが、家族の生活のためにしかたがなくつれてこられた牛でした。特に小さいころからいっしょに育った女の子は、牛との別れをとて悲しんでいました。その様子を見た坂本さんは、明日の仕事を休もうと思

ました。でも、息子のしのぶくんが説得されて、牛を解くことにしました。ぼくは、しのぶくんがお父さんを説得した「お父さん、やっぱりお父さんがしてやったほうがよかよ。心な人がしたら牛が苦しむけんお父さんがしてやんなっせ。」という言葉が心に残りました。牛は、解体されることを知り、最初は、いかくをするようなポーズをとりますが坂本さんの優しい言葉に、もう抵抗しませんでした。ふつうは牛が何かを察して頭をふるのですが、急所をはずすことがあるようですが、この牛は、最後まで少しも動くことがなかったようです。代わりに、大きな目からなみだをこぼしました。坂本さんはその時初めて牛が泣くのを見たそうです。牛が解かれた後、農家の家族も少しづつ肉を持って帰ってみんな食べました。女の子だけは最後まで食べたくないと言いました。しかし、おじいちゃんが、「みんなのた

めに死んだんだから、食べてやらなかわいそやから。」と女の子を説得しました。女の子は、泣きながら「いただきます。」と言い「おいしいおいしい。」と言って牛への感謝の気持ちを忘れませんでした。ぼくもこの場面でなみだがとまりませんでした。坂本さんは、この牛と農家の家族と出会い、命に感謝する女の子の話を聞きもう少し、仕事を続けようと思ったそうです。

今、ぼくがこの作文を書いているときも、たくさん命が解かれています。ぼくは、改めて「いただきます」という言葉に、「命をいただきます」と意味があることを知りました。これからぼくは、なるべく食べ物を粗末にしないようにします。ぼくがこれから生きていくためには、たくさん命をいただくかなければなりません。命だけでなく、多くの食事に関わるすべての人に感謝の気持ちを忘れずに、「(命を) いただきます」の言葉を大切にしていきたいです。

